

# 2019年度学内研究助成 成果報告書

## ① 報告者所属・氏名

生活科学部現代生活学科・須賀由紀子

## ② 事業名

大学生による地域の価値共有の手法の開発  
～社会関係資本の循環的形成プログラムとして～

## ③ 事業の目的

本格的な人口減少局面を迎え、地域住民が自発的によりよい地域づくりを行う自立的な地域社会形成は地域行政の重要な課題である。そのためには、弱体化する地域コミュニティに代わって、地域に愛着を感じ、自分に関わる地域をよくしたいという思いを持つ人を循環的に形成するしかけづくりが必要と考えられる。

その方法として、報告者らは、大学生が要となって世代をつなぐ「大学生によるまちあるき」の仕組みの構築を目指している。本事業では、このまちあるきの汎用性を高めるため、誰もが主体的に参加できる地域の価値共有手法を考案し、その有用性を検証することを目的とした。

## ④ 事業実績・研究成果（具体的に）

### 【事業実績】

本事業におけるまち歩きは、「ただ単にまちあるきをぶらぶら歩いてまちのよさに気づく」ということだけではなく、大学生を要として（高校生など）若年層と地域住民をつなぎ、三者の相互関係の中で地域愛着意識を育てようとする仕組みであり、「地域」を学習の場として、社会関係資本を循環的に形成していくことをねらいとするものである。

先行研究により（2017、2018）、これまでのまちあるきプログラムの有効性は確かめられているが、地域の価値を可視化して共有するための評価項目の選定にかなりの時間を要することが難点であった。そこで、本事業においては、このまちあるきプログラムが、誰でもどこでもできるよう、地域の価値を言語化する評価項目の抽出を初心者でも容易に行うことのできるワークショップ（コアプログラム）を考案し、それを用いた「大学生によるまちあるき」を実施した。

以下の2つのまちあるきを実施した。

#### 1) 「高大連携サマーキャンプ 2019」（8月）

- ・大学生による「コアプログラム」の開発
- ・その実効性について、高校生を対象にまちあるきを行い検証

#### 2) 「大学生とまちあるき」（11月）

- ・1)に参加した大学生が、「コアプログラム」を用いたまちあるきプログラムを設計し、他の大学生を対象に行い、汎用性を確かめた

### 1) について

■プログラム名「高大連携サマーキャンプ 2019」

■実施日：2019年8月5日(月)～8月7日(水)

■場所：八王子大学セミナーハウス（フィールドワーク地：都立長沼公園）

■参加校：江戸川大学・実践女子大学・日本大学、金沢総合高等学校

■参加人数：大学生16名、高校生16名、教員6名

■内容：サマーキャンプ宿泊地近隣の都立長沼公園を、その土地の来訪者である大学生と高校生でフィールド調査をしながら、地域の魅力の源となるものは何かを考えるまちあるきを行った。その際に、SD法を用いた景観調査を取り入れて、地域の魅力を意識化するまちあるきプログラムとしての有効性を検証した。景観調査の調査票作成のワークショップを「コアプログラム」として考案し、参加者事後アンケートを行った。

## 2) について

■実施日：2019年11月10日（日） 13時～16時

調査地：日野市二中地区

参加者：大学生6名、日野市民2名

■内容：

1) と同様の方法で、地域に無関心の大学生を対象に、形容詞を抽出するワークショップを事前に行い、まちあるきを行った。このプログラムは、1) のプログラムに参加した大学生が企画運営を担当し、ワークショップ運営およびルート作成を行った。日野市在住の市民2名に協力していただき、大学生と市民との交流を行った。

### 【研究成果】

#### 1.参加した高校生・大学生のアンケート結果から

サマーキャンププログラム終了直後に、参加高校生及び大学生に「振り返りシート」を記入してもらった。観点としては「プログラムの満足度」「難易度」「プログラムを通して何が学べたか」「自分の地元を振り返るきっかけになったか」である。アンケートの結果、「地域の価値共有手法」を使ってまちあるきをしたことで、地域の姿を捉えることにつながり、まちの姿に興味を持って関わることができていた。プログラム全体の満足度は高く、自分自身の地元を振り返るきっかけにもなっていた。「コアプログラム」として取り入れた「地域の価値共有手法」の方法論についての難しさの意見はなく、取り入れた方法論の意味を理解しており、コアプログラムの可能性が確かめられた。

2) のプログラムについても参加した学生からは方法論についての難しさの意見はなく、コアプログラムの意味を理解しており、地域の良さへの気づきが得られるなど、地域に主体的に目を向けるプログラムになっていた。

#### 2.手法の妥当性の検討

景観評価項目の抽出方法とその妥当性を検討した。

「コアプログラム」では、「地域」に目を向けるにあたって、「自分にとっての居心地の良い場所」から問題意識を持つことができるよう、写真を持ち寄り、その写真について語る中から、景観調査に使う形容詞の抽出を行った。それら形容詞を、「ひと」「歴史」「自然」「まちなみ」「ライフスタイル」という5つの切り口に整理をして、若者（高校生と大学生）の考える「居心地の良い」が、まちの魅力を捉える「ひと」「歴史」「自然」「まちなみ」「ライフスタイル」の5つにどのように関わっているのかを観測し、その結果をもとに、自分たち

の考えた地域の魅力についてまとめ、発表する（地域の人に紹介する）ことにした。フィールドワーク地の、どの箇所（ポイント）で調査を行うかは、下見のプロセスの中で考え、上記5つの視点から設定をし、大学生がルートを考え、実地を行った。

写真を持ち寄り話すという方法については、スマホ世代の若者には障壁となる要素はほとんどなく、「自分の気に入った場所」について語ることで、言葉に熱がこもり、わかりやすいようであった。また、景観評価の項目のための形容詞の抽出についても、ほとんど壁に当たるようなことは発生しなかった。もちろん KJ 法では分類した後の構造化が必要であり、その時点で作業上の関門が発生するが、今回は形容詞の抽出だけが目的なので、この段階で作業が終了する。したがって、ストレスを感じないまま、作業を終了させることができた。

1) のプログラム参加者 19 名の被験者によって 10 ヶ所のポイントを対象にして、のべ 190 票の実験結果が集まった。因子を抽出したところ、5つの成分で 56.5%の説明可能であった。①景観を捉える共通の物差しづくり (SD法) ②そのワード出しのために、自分自身にとっての「お気に入りの風景写真」を持ち寄る ③KJ法を用いて形容詞出しをする ④「ひと、自然、歴史、まちなみ、ライフスタイル」の5つの軸でそれを整理して、まちを見る尺度を共有化する ⑤その尺度を用いてまちあるきを行い、SD法のスコアを分析して、まちの特徴を言語化する、という一連のプロセスが、一つのまとまりをもったプログラムとなることが検証された。



高校生と大学生で評定尺度抽出



フィールドワークを実施



調査結果の集計



発見を地図にまとめる

#### ⑤ 研究成果の発表・活用（学会発表・論文掲載・地域連携・産学連携など）

- ・土屋薫・須賀由紀子（2018）、若者による地域の「見どころ」把握に関する基礎的研究、江戸川大学紀要(28)、327-335、
- ・土屋薫・須賀由紀子（2019）、地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築、江戸川大学紀要(29)、305-313
- ・土屋薫・須賀由紀子（2020）、社会関係資本形成に向けたワークショップ技法に関する研

究-まちあるきプログラムづくりにおける評定尺度抽出の検討-、江戸川大学紀要(30)、365-374

・須賀由紀子・土屋薫、大学生による地域の価値共有プログラムの実践、第11回地域活性化学会、2019

・土屋薫・須賀由紀子、まちあるきプログラムづくりにおけるSD法導入に関する研究、レジャー・レクリエーション学会第49回学会大会、2019

・大学生による地域の価値共有の手法の開発～社会関係資本の循環的形成プログラムとして～、江戸川大学・実践女子大学 大学間連携事業報告書、2019

## ⑥ 今後の展開・継続性について

本事業では、「大学生によるまちあるき」を行うにあたって、まちあるきで使う地域の価値共有視点の抽出を容易に行う手法の考案を行い、その可能性・妥当性について検証することができた。

今後、さらにプログラムの扱いやすさを高め、「誰でも、どこでも同じようにできる」まちあるきプログラムの標準化を行っていきたい。また、このプログラムでは、まちあるき参加者は、あらかじめ決められたルートをガイドに従って歩く形であり、参加者自身による能動的な発見が少ないことも改善点である。この点に関しても新たな手法を探っていきたい。

地域の価値に「若者」が気づく、そして「若者」が要になって、地域の多様な世代の意識を交わせ、地域づくりの主体者となる人の厚みを作っていく（ソーシャルキャピタルの形成）という営みは、本格化する少子高齢・人口減少時代の地域自立社会づくりに、非常に大切なことである。今後、さらに、このまちあるきプログラムが、より楽しく、誰にでも手軽にできて、かつ、地域愛着にしっかりと結びつくプログラムになるよう標準化し、学校教育でも重視されている地域教育や公民館などの社会教育プログラムとして広く活用できるようにしていくことは、社会的意義が高いと考える。今後も地域の様々なステークホルダーとの地域連携をはかり、共同研究をすすめていきたい。